

明治34年（1901）3月、文学博士沼田頼輔の次男に生まれ、第一高等学校を経て、大正13年東京帝国大学工学部土木工学科を卒業し、直ちに同大学土木学科講師、同14年助教授となり、日本大学工学部の講師を兼ね、水力学、水道工学を講じた。昭和7年学窓を離れ、群馬県桐生市の水道事業を完成したが、昭和8年6月、満州に渡り、哈爾浜特別市公署工務処企画科長となり、佐藤俊久処長の下にあって山崎桂一技佐と共に大哈爾浜都市計画の立案を行なうと共に、水道科長として同市の上下水道の計画及び事業を遂行した。また都市計画事業遂行のため同市に都市建設局を設け、佐藤処長就任後に同市工務処長兼都市建設局長となった。昭和12年7月、民政部土木司都邑科の全満の都市計画の事務が国务院内務局に移管されるや選ばれて同局都邑計画科長となった。偶々満鉄付属地行政の満洲国移管に伴い、付属地の公共施設の移管並に一貫した都邑計画行政の推進に努力していたが、急激な都市の発展に対応するため、再び都市計画行政は交通部に移され、昭和13年6月、初代都邑計画司長に任せられ、全満の都市計画を指導した。この間地方都市の都邑計画機構の整備を行なうと共に、都邑計画法の改正に着手した。昭和14年6月、戦時体制の強化に伴な

い、満州国政府は国务院の企画処を拡充したが、この時沼田は総務庁参事官となって企画処第二部長となり、綜合立地計画とその調査、並に化学技術部門を担当した。綜合立地計画は、日本の企画院が行なった国土計画であり、その先駆的役割を果したのである。昭和18年7月、転じて交通部水路司長となって河川行政を主管したが、同19年蒙古政府交通部次長として大同に赴任し、同政府の技監、総務庁次長を経て20年総務庁長になった。終戦後は徳王と共に南下したが、21年5月帰国し、専ら野にあって建設事業に参画した。晩年は六興電気軌の社長会長として電気事業に携った。57年4月急死したが享年81才であった。

氏は頭脳明哲、豪放磊落、満州国、蒙古政府の高官として、これら地域の開発に尽力した功績は大きい。趣味は野球、ゴルフ、特に酒を嗜み、酒に関する逸話は多い。また面長な顔は當時満洲三名馬の一人に数えられた。

